98
151/1

始

2-264
98-15/1

序

われ若しわが隣人と一微塵の異なるなくんば誰か我存在の價値を認むるものあらん。詩人の傳ふべきは貂を續ぐに貂を以てするの才あるが故にあらず。太倉の粟陳々相依る。昔人既に之を忌めり。

ヲーヅヲースの詩別に一家の機杼ありて漫に他人の籬下に立たず。題を村翁に藉り興を澗花に托す。此一事既に彼を傳ふるに足る。獨造戛々なれば片言も又百代の師たり。好惡は問ふ所にあらず。

浦瀨君の譯詩十數篇多くは斷篇に過ぎず。且其措辭搆

帝國圖書館藏
大正 9. 12
内交

句湖畔詩人の面目を寫して遺憾なしと云ふ可らず。然れども寸に進むは尺の意なり。傳ふ可きを傳へんとす其志既に可なり。譯して成る更に可なり。譯の難きは原作の難きより難し。易きを棄て難きを擇む最も可なり。飢る時は半臠も滋味長し。世のヲーヅヲースの名を聞いて未だ其詩を讀まざるもの或は此篇に對して食指の動くを癒し得ん。これを序とす。

（明治三十八年六月）

夏目金之助

はしがき

原詩の意義は一にマクミラン會社の出版にかゝるウエップの註解に由り、尙ほ解し難き所は講師諸先生の說を仰ぎ、出來得る限り原義を失はざらん事を勉めぬ。然れども自から曲解して却つて之を知らざるもの多からん、幸に大方の高敎を仰ぐ。

韻文を韻文に譯す、一字一句を拾うて原作のまゝ譯し出でゝ事は、到底調節の許さゞる所、されば原義を失はざる範圍に於て、融通を調節の上に求めたれば、時、人稱等の關係の如きは、從つて原作と軌を一にせざる所あり。

又時に故事、傳說等、特に註解を要する如き所は、其等を詩の中に譯し加へたる場合、例へば「蝶追立つる知更鳥に」の如き者あり。或は又原義を逸せざる範圍に於て、時々修飾を誇張して譯文の平坦に流るゝを補へる所もあり。然れども其難解の句は飽迄之を穿鑿して、覺束なき乍らも原義を傳へん事に苦心したれば、決して故らに誇張して難句を糊塗せんとしたるに非ず、讀者幸に諒せよ。此書の出版に就ては、英男吉川君及び梅城前田君に負ふ所少なからず、特に記して兩君に謝す。

譯者識

ウヰルヅ チョスの小傳

苟も詩集を手にせん程の人にして、其名を云はざるなき湖畔詩人は、千七百七十年英のカムバランドに生れ、千八百五十年八十一歳の高齡を以て、ライダルの閑居に逝きぬ。

彼は八歳にして母を失ひ、十四歳にして父に背かれ、其叔父の助によりて十八歳の頃ケムブリッヂ大學に遊び、二十二歳にして業を終へぬ。而白きは詩人の幼時なり、母なる人と爭ふては、常に什器の投合ひをなしたる事ありと傳ふるバイロンあり、泣き蟲と綽名せられたるシエレ

ーあり、而してウォルヅヲォスの幼時亦實に此二詩人と選ぶ所なかりき。彼嘗て叔父の家に寄寓するや、其冷遇せらるゝを恨みて三階に走り、鈍刀を振つて自ら刎ねんとしたる事ありとは、彼が後年自白せし所なり。彼は大學在學中佛に遊び、業を卒へて、ルイ十六世は斷頭臺に斬の激流は佛の上下に奔注し、又更に佛に遊びぬ。當時革命られ、ギロッティンは白晝兇器を擁して大道を横行しぬ。さなきだに年少氣鋭の感情詩人は、自由平等の聲に激せられ、其業を大學に終へて、再び佛に遊びし二十二三歳の頃は、殆んど詩を忘れ、自然を忘れて、革命に狂したり

き。其少時にありてはドンキホテー、ガリバー巡遊記を耽讀し、大學に入りてよりは、常に自然に憧れて詩囊を養ひたりし彼は、當時既に二三の作物を公けにしたりしも、其の新しき聲は俗衆の聞く所とならざりき。否な彼が詩聖として仰がれ、彼を讀まざれば紳士の體面に關すとまで賞讃せられしは、其エキスカーション、ブレリュード等を公にせし後、彼が五十歳の高齡を迎へたる當時の事なりき。大學を出でゝ再び佛に遊び、倫敦に歸りたる後も、四方に流寓して世に用ひられざりし彼は、其二十六歳の時、一友の遺産九百磅を殘して、飽迄彼に詩人の

天職を全うす可きを戒めて逝きし迄、窮迫の中に日を送りたりき。彼は茲に於て其居をソマセットにトし、日夜詩境に入つて、専念創作に從事するに至れり。其のコールリッヂと相知りしは當時の事にして、又た彼を扶けて能く其詩才を發揮せしめたるは其愛妹ドロシイなりき。かの漫遊記（エキスカーション）は此頃の作なり。彼はハッチンソンと婚したる三十三歳の三四年前より、グラスミアーに移り、其ライダルに居をトしたるは四十三四歳の際なりき。プレリュードは三十五六歳の際に成りしものにして、其他の小品の多くも、當時其妹等と共に、或は蘇國に、或は佛蘭西地方に

旅行せし時折の作なり。彼をライダルに圍繞して詩興に遊びしものは、ディクインシー、コールリッヂ等にして、其スコットを蘇國に訪れしは、猶ほ後年の事に屬す。彼に五人の子女あり、或は幼にして逝き、或は壯にして逝き、其多くは彼に先ちて逝きぬ。彼の後年は之が爲めに悲愁の日に封され、其ライダルの山中に籠りしが如きも、この悲しき感銘より逃れんが爲めなりしと傳へらる。然れども彼は平和なる家庭に於ける寛大なる夫にして、慈愛深き父なりき。

以上は彼の畧傳なり、今少しく詩人としての彼を窺はざ

る可からず。

ポープに由りて擬古の詩風を呼びし英國の詩風は、詩句の彫琢に走りて、常に其美を技工の末に爭はんとするに至りぬ。而して之に反抗して立ちしもの先にクーパーあり、後にウォルヅヲォスあり、シェレー之に繼いで此處に一詩風を完成する事を得たり。クーパー、ウォルヅヲォス、共に自然を謳歌し、詩題を人事卑近の事に取り、眞率の筆を以て自己の直情を遣り、然も粗笨に陷らず、野鄙に流れず、技巧を弄せずして直寫し來る所二者能く相似たり。然して只其異なる所、彼は靈に由りて發現せられたる自

然を謳歌し、之は自然を歌ひつゝ其中に威靈を發見せんと勉むるにあるのみ。委しく其詩形に入り、其思想を推及して彼を詳論せんは、行程未だ至らざる我の容易に爲し得可き所にあらず。余は只此譯詩を公にするに方りて、其略歴を摘記すると同時に、些か彼に就て知り得たる所を述べたるのみ。他日折あらば更に筆硯を洗つてクーパーを紹介し、此二詩人を對照して英文壇に於ける雙星の半面をだも窺ふ事に勉めん。

目次

ウォルヅヲォスの小傳　Imitation of Immortality from Recollection of Early Childhood.
とはの命　Written in March.
嫩葉の賦
ウェストミニスターの橋畔に立ちて　Composed upon Westminister Bridge.
鹿飛ぶ泉　Hart-Leap Well.
至靈　Fidelity.
森蔭にて　Written in early Spring.

おつゆ　Lucy Gray.
野の乙女　Solitary Reaper.
水仙花　I wandered lonely as a Cloud.
美しき夕　It is a beauteous Evening.
暮行く空　From the Plain of France.
同胞七人　We are Seven.
蝶に　To a Butterfly.
雲雀に　To a Skylark.
紅雀に　To a Linnet.
蝶追立つる知更鳥に　The Redbreast chasing the Butterfly.
我妹子に　To my sister.
眠に　To Sleep.
花子の歌へる　Pet Lamb
海邊に立ちて　Composed by the Seashore.
靜かなる夕　Calm is the Flagrant Air.

以上

ウォルヅヲォスの詩

とはの命

一

牧場、森影、清流の
世の物皆は幻と
天國の美を裝ひつつ
彩りし日もありけるを

浦瀬白雨譯

今日老いの瀬に顧みれば
物象とはに榮もなう
そのかみの香は失せにしか

二

虹霓大空に跨ぎては
やゝにうつろひ薔薇花は
又麗しく空に笑み
澄みたる空は水に似て
月ほゝゑめば星くづの

淡き夜な〳〵空きよし
朝暾ありし面影に
又行返り照らせども
我が行く處とこしへに
世の光榮は今見えず

三

百鳥空に鳴き交はし
小羊野邊に狂ふ時

胸に悲愁の思あれど
詩神沈默の領に入れば
其時我に力あり

飛泉空谿に轟けば
悲愁其時我を去り
谺は山を走りつゝ
嵐瀧つ瀨に襲ふ時
物象新たに生を得る

自然の壯美、山川の
快樂の中に覺め來れば
水無月風はこゝろよく
生物休養の香に飽けり
其時汝快樂の子
羊飼ふ子よ我側に
快樂の歌を來り誦せずや

四

汝幸多き小羊よ

汝が呼交はす歡聲に
天の榮光地に映ゆと
覺えし時よ歡樂の
響を胸に傳へしか

天の榮光地に映えし
五月の朝うら〳〵と
曙光東に彩れば
百千の谿間綠亂の
花遠白う匂ひつゝ

自然が投げし榮光の
胸の小琴に觸る時
童野邊に駈行けば
乳房哺みし嬰兒も
母の腕に躍れるを
我などかくて淋しさの
思に一人痛む可き
快樂其時胸に湧くよ

さは云へ幼き己が眼に
ありし地上の榮光は
今し何處に行きけんと
彼處に老いし一本の
梢、かの畑、咲薫る
菫よ和して繰返しつゝ

五

我人の世に來れる日
自然の至靈榮光の

魂は一時忘却と
眠とに置きし魂なれば
生命の星のかりそめに
かぎろひ行きし如くなるも
やがては遠き大空に
又現はるゝ時あらん
人よやがては光榮の
跡尋ねつゝ天つ國
奇しきみ園に歸らでや

幼なき時眼にありし
自然の榮は時と共に
生ひ立つなべに移ろへど
奇しき血に湧く若人に
自然の榮は殘りたれ
さは云へ若人人となりて
世の煩に惱まん日
榮は何時しか世を去りぬ

六

うれたしの世よ其積襞に
自然が生みし神の子を
例へば慈母が一人子を
抱き劬はらん樣にして
この嬰兒を天國の
記憶より今日誘ひては
誘惑の淵に投げんとて
劬はり育て冊けり

七

其罪なさに見恍れたる
父のみとりに罪もなう
遊び戯るゝ幼兒の
まだ世に染まぬ罪なさに
母寄添ひて頬擦れば
頭振ひて否みしを
見よ膝下に人の世の
眼に映るさま〳〵を
幼子眞似び作りたり

かくして宴席、花の宴
臨終の床、送葬の寂
やがて心も移ろへば
和して是等に歌ひつゝ

かくて世の賢、戀、怒
其等もやゝに人の世の
むなしき榮と享樂に
行變りては他の仇の
假のすさびに溺れつゝ

今日しも老いの瀬に立てり

八

胸には燃ゆる永遠の
奇しき光はあり乍ら
そを知らず顔に粧へる
幸多き哉幼子よ

自然の寵に浴みては
美の堂奥にほゝゑめる

その幸多き哲人の
面影を我汝に見る

世の人皆は盲なるを
汝は獨り永遠の
奇しき生命に包まれて
深く神秘を闡きたり

幼兒よ汝いましはも
暗きにかくる遠き世の

眞理に憩ふ豫言者の
尊き面に似たる哉

汝幸多き幼き子
とはの命は汝が胸に
永へ絶えず宿りつゝ
人は惱める野に立ちて
獨り身の幸誇る身の
幼兒よ汝は何故に
やがては來る人の世の

桎梏を先づ呼ばんとはする
今し人の世習俗の
煩はしきが魔に乘りて
來りて汝に宿りなば
汝が胸に霜と凝り
終世累をなす可きを

九

うつろひ去りしそのかみの

快樂今猶胸に燃えて
永劫盡きぬ歡樂の
琴の緒胸に震ふかな

幼き時よ歡笑の
思に今日も微笑みて
憂さ知らざりし我なれど
さは云へ外界萬象の
種々相今し一に歸すと
長かりし己が煩悶の

今日闡かれし嬉しさに
自然の至靈仰ぎつゝ
是處にして我歌ひ稱へん

それのみか今日幻の
實なる世相歡樂に
をのゝき避くる精靈の
尊きが宿る胸と知りて
美くし過去の非を知りし
我なれば今ひれ伏して

讃美の歌を誦して見んかな

今日老いの瀬に顧みる
幼き時の追懐に
とはの命のつきせざる
光は胸に残りたれ

さなり蜉蝣を世に寄せし
我よ永しへ限なき
その永遠の影なれば

ここにして我は永刧の
眞理の中に靈を得て
不朽の命あたゝかき
自然の胸に抱かれん

されば天象平穩の
和樂に眠る眞晝時
我はもたとひ天さかる
人里遠く分け入るも
思はやがて里越えて

遠き海邊に馳行かば
其處にして嘗てうつせ貝
拾ひし濱邊偲び出て
岸邊に寄せし大浪の
畝りに淡き夢に入らん

十

小鳥よさらば枝に鳴け
小羊よさらば野に躍れ
若草烟る朝明に

五月の韻妙なるを
肚子裏に覺むる衝動に
傳へし汝等調高う
歌ひ躍らば是處にして
我又共に歌ひたゝへん

よし今假令そのかみの
草花の榮は世を去りて
四顧する彼方風物は
とみに光を包むとも

猶殘りたる榮光と
胸の小琴に秘めたる
深き韻に興を得つゝ
あるは哲理の光明に
死後の不朽を尋ねては
力を其處に認めて
殘る光に憧れん

十一

小丘、曠野、森、飛泉

我永しへに汝とあらん
いましは己が胸奥に
秘めたる强き力なれば
希望は淡き老いの身も
汝があたゝき懷に
抱かれてとはに眠らばや

曙光艶なる朝日影
いざよふ夕日に彩れる
縹色濃き夕雲は

嘗て遊びし山蔭の
澄みたる水と今にして
我に慰藉の色なるを

人の心の奥深う
かくれしなさけ、よろこびの
其處に餘れる感謝あり
道の邊に咲く雜草の
秘めし心に云ひ知らぬ
涙拭ひし我なれば

嫩葉の賦

雞鳴いて、泉流れて
湖の面漣皺め
百鳥林に囀りて
綠の野今眞晝に眠る

壯者先に鍬取りて
老いも若きも畑に出て
家畜六十野に放れ

皆一齊に首俯して
露熟りたる嫩芽食む

千萬の軍戰負けて
さと引く如く雪は消え
畑ならす子は首あげて
ま鍬たゝいて春來とさけぶ

里に歡び山に榮
片雲高く飛去つて

大空瑠璃と遠く冴え
雨いま晴れて春に入る

ウエストミニスターの橋畔に立ちて

灝氣流れず地に澄みて
大都見よ今眠より覺む
巨舶、塔頂、高閣、伽藍
空に明るう、野に遠白う
煙も見ざる大空かけて
沈默の領に今明け放る

黄金の征矢を地に投げて
登る朝日は谿、森、山を
かく壯麗に照す可きや
漣もなく眠りて流る
テームスの水靜かに逝いて
家々はまだ熟睡せるか
大都聲なく力に眠る

鹿飛ぶ泉

夏の眞晝を飄搖と
大空に飛ぶ雲のごと
ウエンスレー沼を西に打ちし
騎馬武者一騎城樓の
搦手の戸に馬立てゝ
「替馬此處へ」と呼はりぬ
「召せ、御前に」と曳出すを

得たりや應とサァー・ウォーターは
今日早や三度の替馬に
手綱搖りかけ乘移る
連錢鹿毛は八寸餘り
三國一の逸り物

駒は逸物乘手は猛者の
サァー・ウォーターは鞭くれて
飛ぶ鷹のごと野を打てど
沈默に入れる野も山も

唯森として蹄の音は
雲渡るかと靜かなり

潮寄するごとどう〳〵と
今朝朝まだきサアー・ウォーターの
城門立ちし騎馬百騎
一騎消え三騎消え
總勢消えて滿山は
今獵夫等の影も見ず

騎虎の勢止め難く
今只殘る獵犬の
ブランチ、スウィフト、ミューージャク
名だゝる三頭引具して
サアー・ウォーターは山を馳す

嚇しつ、賺しつ、叱咤しつ
疲れし犬を勵まして
樹の間を深く狩行けば
息切れたるか獵犬は

齒朶茂りたる山腹に
倒れたるまゝ立たんともせず

野にこだませし笛の音も
先逐ふ聲も、蹄の音も
今滿山に收まつて
妖魔の森は森閑と
眠れる中を獵夫の猛者は
樹の間の遠にさを鹿の
姿をちらと認めしが

鹿は何處を如何に駈けて
死にたるものか分からねど
岩が根づたひ山腹を
馳せしものらし四肢踏逸らし
白泡噛んでさを鹿は
騎者の馬前に斃れたり

ひらりと馬を飛下りし
從者も具せざる騎馬武者は

菩提樹の蔭身を寄せて
獲物戍りて微笑めり

峻坂馳せし連錢鹿毛は
霙の如き泡噛んで
母胎を出でし羊より
總身脆弱く萎へたるが
猛者の後ろべ汗かいて
鼻息白う疲れたり

湧く山水に首伏せて
斃れし鹿の吹きし息に
水の面はひた〳〵と
漣小さく皺めしが
鹿は其塲に斃れたり

世の人々の味ひ知らぬ
奇しき歡び漲上る
肚胸の騷押へ兼ねて
瞶めて立ちしサァー・ウォーターは

獲物の傍二度三度
雀躍りしつゝ往返りしぬ

サァー・ウォーターは一町許
山を東に登行けば
こは山獣の足跡か
芝生の上に斑々と
三所に同じ蹄の痕

と見し獵夫は眼を見張り

「こは奇怪なりかの岨を
下の泉へさらば鹿は
三足に飛んで斃れたるか」

「よき所こそ見出でたれ
いで我此處に高樓建てて
山野の景に憧れん
さば野に迷ふ旅人や
巡禮の宿もかねて、若き女の
忍ぶの戀のよすがともなる」

「諸國の工匠呼集へて、水槽剜らせ
湧出る泉を之に受けて
さなり飛ぶ鹿の泉と、名もふさはし」

「又我鹿の形見には
三基の石柱建立なし
蹄の痕へ埋め置いて
長く牡鹿の手柄とせん」

「夏にもならば伶人具して
長き一日を忘れんも
又興とこそ、興とこそ」

「此劒山のあらん限り
高樓たか知り此處に立たば
スヴエールに鍬取る民百姓
フールの森の民草も
わが清興に聞、恍れなん」

地に轉がれる石のごと
四肢踏ん逸らし斃れたる
鹿は其儘殘し置きて
獵夫は館に歸りしが
月三度とは虧けぬ間に
美をつくしたる高樓は
かぎろひ立ちぬ山際に
池に湧く水は水槽に受け
三基の石柱並び立ちて

幹に亂るゝ葉の縋れ
萬枝一齊に空を指す
千種の幹の賑ひに
百花繚亂嚬いて
高樓深う封じたれば
日の目も風も漏るまじう
乃圖の館は美しかりき
高殿の奥紫や
花も綾ある裙摸樣

緋扇輕う歌ひつれ
笑みさんざめく饗宴の
こは花やぎし驕かな

乃圖は美しき伶人の
腕によりて歸るも忘れ
眞夏の寂を遺りたるが
歡樂つきぬ饗宴も
時の流の止まぬ間に
口碑のあとに留まりて

サァー・ウォーターも逝きしとよ

＊　＊　＊　＊

夏の木蔭に草を敷き
もの思ふ人の傍に
歌へば足らう己が身に
聞く人の肉に針刺して
血を凍らする物語
語るは己が術ならじ

リッチモンドへ旅すると
山路を越えし一年よ
人影絶えし谿合に
白楊四本影淋びて
立ちしが中の一本は
湧く山水に程近く
方形の地の三隅に
他の三本は幹朽ちて
馬頂に歩ませて

谿間を下に瞰下せば
石柱三基列なつて
一基は遠く岡の上
朽ちて立ちたる老木の
梢碎けし傍らに
廢址か蓬枯伏して
いにしへ語る虫の音は
遊子の魂に寒かりき

馬上に一人つく〳〵と
岡の遠近見渡せば
自然の榮は此處を去り
滿山慘と色褪せて
斯く恐ろしき景象の
又見る可くもあらざりき

集まり來たる感慨の
解くよしもなう馬立てゝ
煩ひ居れば羊飼ふ

翁か山を登り來る
袂捉へてゆきし世の
昔を問へばサー・ウォーターの
狩の一日の物語

「昔の榮はうつろひて
さびたる今日の樣かな」と
翁は猶も續けて語る

「かの朽ち立てる白楊を

人は山毛欅とも楡とも傳へ
其森蔭に奥深う
百萬石の大殿の
玉の亭はありしとよ」

「石も、泉も、築山も
昔のまゝに殘れども
美を盡したる亭の迹は
夢幻と忘られて」

「かの水槽に湧く水は
馬、犬、羊、小鹿迄
今に必ず口觸れず
觸れざるのみか眞夜中に
槽の底より呻く聲」

「一年此處に斬殺の
殺氣今猶ほ祟して
血の精凝つて呼應すと
人云ふめれど嘗て我

木蔭に獨身を寄せて
こは鹿故と思ひ見ぬ」

「思や如何か閃きし
上の石より岨迄は
三脚なりしと見そなはせ
君よそは又餘りなり」

「十時餘りを息せきて
馳せ疲れたる鹿の身に

殊更湧ける山水の
其傍を死場所に
定めて此處に死にゝ來し
その因緣は分かねども」

「或は夏の眞晝時
この草の上やま水の
湧出る聲に聞き恍れて
熟睡したるか然らずば
そのかみ母の膝下を

さまよひ出でゝ此水に
初めて飲みし其折の
縁由思ひて來りしか」

「或は春の眞盛に
葩踏んで鳴交はす
百鳥の音に憧れて
匂ふ木蔭に醉ひたるか
さらずば其と思はるゝ
限りを云へば湧く水に

枕して鹿は生れしか」

「君見そなはせ草も木も
見る蔭もなく枯伏して
生命を送る日の影は
それより谿に照らざりし
泉は涸れて木も石も
朽ち行く迄はかくこそと
榮うつろひし谿間なり」

「翁よ其もさる事なれど
我に説あり乞ふ説かん
恵洽ねき自然なれば
其の暖かき懐に
抱かれて鹿は眠りたらん」

「空居虚空を貫きて
谿の木の葉に到る迄
蔽はぬ隈なき奇し霊の
情に生きし鹿なるを

など死せし時其愛の
恵の露に漏れたらん」

「その殿様のお館の跡も
今黒土となりしとて
一度は自然の懐に
花咲く昔に歸らでや」

「今こそかくも恐ろしの
荒れ廢れたる様なれど

若し世の人に獣も鳥も
同じ心にいつくしむ
やさし情の萠しなば
土潤ひて日も冴えて
ありし昔に歸らでや」

「此處に則あり翁よ來れ
土這ふ蟲に至るまで
情知るものそを苦しめて
わが樂とすなとこそ

わが樂とすなとこそ」

至靈

狐か犬の鳴く聲に
羊飼ふ子は山の際
耳、欹てゝ佇みつ
倒れ伏す株、苔蒸せる
岩角所々を眺めつゝ

今しも遠く青草の
偃して波立つ隙とめて

山狗の影痩せたるが
伏す萱の間に見え隱れつゝ

そゝり立つ岩空洞の
峽間の奥は人淋びて
鳥語も聞かぬ眞晝いを
狗は何をか求めつゝ
怪しき聲に泣き叫ぶ
人見て避けし犬なれば
山狗の類にあらざれど

泣き叫ぶ聲の怪しさに
羊飼ふ子はまどひつゝ

前は懸崖百尺の
後は湖水靜かなり
消え殘りたる去年の雪
初夏猶殘る谿にして
人里遠き幽谷は
太古の寂に默したり

小魚湖水に狂うては
漣絲の積襞を織り
鴉の鳴く音岩角に
空虛の響傳行く
青嵐そよぎ風歇めば
懸崖西に虹跨ぎ
雨脚亂れて風去れば
岩の面時に狹霧罩む

空翠谿間に澄行く日

朝日は赤く岩に照り
闇雲四方に塞がれば
夕疾風掠め行くも
さはいへ巨巖雲の上
太古天來の威に誇る

怪しき犬のさまなれば
牧者はしばし惑はれて
行くみたるが草の隙
分けつゝ走る犬に尾し

後れじとこそ走りしか
伏す岩角の影にして
見よ旅人の髑髏を
眞相や如何にと惑ひつゝ
戰きて彼は行めり

天そゝり立つ絶壁の
岨より落ちし旅人の
死屍と知りし牧童は

今にしてこの旅人の
一日(いちにち)岨(たび)にかゝりたる
其時さへに思出でつ

今猶谿間に迷ひつゝ
怪しき聲に泣き叫ぶ
小犬は既に月を越えて
獨り谿間にさまよひき
旅人(たびと)岨を落ちしより

小犬は主の死屍(おくろ)守りて
獨谿間に殘りしが
小犬は何處に餌(えさ)を得て
猶泣き叫びさまよふか
そはかの奇(く)しき世の人の
窺ひ知らぬみ主(たゝ)、靈(ろ)の
慈光滴る力をぞ

森蔭にて

自然の榮に憧れて
そこはかとなき人心
すゞろ肚胸に漲りて
今我れ全く興來の
自然の胸に入るまゝに
人は何故生れしと
爭ひ絶えぬ人の世の
果敢なさ切に悼まるゝ

かのあづまやの櫻草に
縺れて咲ける雁來紅は
大氣に吸いて咲き誇る
花は快樂に咲くらしと
我は幾年信じたり

又我側に樂しげに
飛び翔りては鳴交はす
やさしき鳥のさま見ても

鳥は快樂に醉ふらしき
花や小鳥の心根を
我知る可くもあらざれど
小鳥も花も興往いて
快樂に堪へぬさまなれや
やゝに綻ぶ軟らかき
嫩芽は風を招きつゝ
擴ごる見ても木にも又

快樂はありと知られずや
かく花鳥に快樂ありと
由なき我のすゞろ言の
神より來る眞理ならば
我又などて「何故に
人生れし」と問ふ可きや

おつゆ

ある朝野邊の逍遙に
狹霧罩めたる奥深く
淋し乙女の立姿
露といふ名は聞きにしか

隕星落つる大沼に
咲く藻の花を友として
戀さへ知らず人となりし

お露はよき子みめよき子
薄枯伏す野に行けば
鹿の子も居よ兎も居よう
されどみめよきお露の顏は
草を分けても、起しても

「どうやら今夜は雪と見た
お露お前は寒かろが
提灯持つて、傘持つて

母さん迎ひに行つておぢや」

「そんなら父さま往て來ませう
次の町迄やつい一走り
今鳴る鐘が暮六か
まだお日の目も映して居る」

「ご苦勞ぢやのう」と云つたまゝ
阿爺はよッちら山刀振上げて
側目も振らず薪を割る

お露は町へ提灯挑げて
犬に追はれて谿駈ける
鹿も及ばぬお露の早さ
煙と吹雪く雪蹴つて
町へ〳〵と一散駈に

どう〳〵どッと吹募る
暴風の中を峰に攀ぢ
又谿渡り急げども

町は何處やら佇めば
峯の松風雲晦し

胸安からぬ二親は
一夜をおちず野に山に
尋ぬれど、求むれど
おつゆの影は見えざりき

明日の朝明二親は
沼見晴らせる劒峰に

山又山を見渡せど
我家につゞく山脈の
雪の被衣の煙るのみ

三人逢はんは天國と
涙に暮れて母と父
悄々下る峯の岨
小さき足跡の雪路に
足跡跟けて峰を下り

枳殻垣や石垣の
前を傳へば畑原
痕を拾うて二親は
橋の袂に巡り來ぬ

眼落しもせず一つ〳〵
拾ひ辿つて行く程に
橋の半ばに及ぶ頃
足跡は俄かに見えずなりぬ

村の父老は語るらく
おつゆは今に生娘の
生きて淋しく野に立つと

美くし聲に調細う
山越えて里越えて
流して行くは顏よき子
美しき子の露ちやんか
聲の噎びて風に泣く

野の乙女

見よ畑中に野の乙女
刈りては束ね、束ねては
歌ひつゝ刈る白晝の寂
默ッて此處に聞いてゐよ

獨り刈りては又束ね
歌ふ鄙ぶり面白や
遠き谿間に谺して

あれ唄聲の流れ來る
雲飄搖のアラビヤに
去來の影を投げて行く
歩み疲れし旅人の
故郷遠き草枕
思出の淋夢と湧く
其痛もつ胸にさへ
鳴く鶯の清き音も
などかく妙に響かんや

夢路は遠きへブリッヂの
海の淋しさ鳴破る
杜鵑さへなどてかく
鋭き聲に鳴きたらん

乙女の歌は何の歌
いにしへ遠き幻の
儚なくゆきし古事か
あるは夏野の夢の跡

今日戦朽ちし戰の
弔歌か、さもなくば
日毎世に湧く悲しさや
痛み嘆のかず〳〵の
世にありふれし鄙唄か

歌の心は分かねども
乙女は前に屈みつゝ
刈伏せ〳〵小休みなく
我佇みて聞ける間を

やさしき聲に歌ひ續くる

小山に攀ぢし後も猶
耳には聲の殘りしが
其後歌は聞かれざりき

水仙花

雲心なく岫を出で
迢々谿を渡るごと
さまよひ來れば水仙花
湖の邊、木の蔭に
軟風習と吹くなべに
さと靡きつゝ、躍りつゝ
數知らぬ星大空に

瞬たく如く湖の
岸の邊遠く咲續き
ひら〳〵靡く水仙は
萬花一時に射り來る

花影碎く湖の
波より輕く花片は
歡溢れひら〳〵と
皆一齊に躍れるを
我など惱み倦ず可き

眼に集まれる歡の
價な問ひそ我はたゞ
見戍り立てり葩を

身を投伏してさびしさの
思に沈む折々は
寂の快樂と湖の
岸の花影偲びては
胸高躍る我身なり

美しき夕

聖壇の前額伏す尼の
默禱神に入れるもかくや
晩晴朗らか灝氣澄みて
威靈を裹み靜かに流る

雄大の天海を壓し
夕陽ゆら〳〵沈む頃を
聞け威靈あり百雷のごと

切初破滅を未知に置いて
轟くものあり世を曠うし

さは云へ此處に遊び興ずる
童汝はそを知らざれど
知らずとて汝神ならざらん
聖壇の前に額づきて
汝はアブラハムに抱かるゝよ
神知らぬ身に神は宿りて

暮れ行く空

暗き浪の上漂ひし
ノアの巨船アラヽトの
嶮岩高くかゝるもかくや
夕陽黄金の征矢を射る
大空西に蟠まり
雄姿颯たる雲のさま
狂ひ雄たけぶ大獅子の
巨頭擡げし様なるや

あるは黄金の戟呑むと
口開いたる大鰐の
躍るが如き形せるや
白堊きらゝか日に燃えし
町家の此方打ち煙る
森は丹摺に褪行きて
不滅の霊の安らかに
眠ると聞けるエリジァの
其静かなる森のごと

今萬象は見えずなりて
かぎろひ行きぬ闇の戸に
見よ聲もなき黄昏は
虚榮の影を爭ふと
人の子焦躁る朝々を
迎へては又忘却の
淵に投げつゝ流れ去る
攝理を赤裸々地に据ゑて
帷幄褰げて示さずや

同胞七人

美くし血潮みなぎりて
つく呼吸輕き少女子に
死と云ふ事の分る可きや
一日鄙のすゞろあろき
領に絡めるさげ髪の
繚々搖るゝ愛らしき
八つと云ふ子に行會ひぬ

着けし布子は里びたれ
鈴張り眼愛らしの
人恐れせぬ可愛さに
「兄さんあるの、幾人」と
問へば少女は振仰ぎ
兄弟皆で七人と

「七人居るッて皆家に」
話せと云へば少女子は

連睹つゝ顔上げて
「二人は他所に、二人は海に
あの松ちやんと、きんちやんは
お墓に往つて母ちやんと
私は其處に住んで居る」

二人は他所に、二人は海に
家に汝の一人ならば
五人ならずや同胞は

「否、同胞は七人よ
二人は墓の木の下に
眠つて居れど七人よ」

少女よ汝は生きてあれど
墓の二人は死にたれば
五人ならずや同胞は

「母さん處から一町許
青草萠ゆる墓の内

其處に二人は居るものを
並んで共に居るものを」

「其處に行つては靴下編んで
手帕縫つて
松ちやんたちに歌つて聞かせ
日暮方にはご飯ももつて
其處で一所に食べるもの」

「妹の方のきんちやんは

神様の手に抱かれて
とうから其處に行つて居り
草枯れし頃手を取つて
其處で遊んだ松ちやんも
雪の降る頃きんちやんの
蹤を慕つて往つたもの」

そんなら吾子よ二人は天に
殘る五人世にあらば
汝が同胞は幾人と

問へば少女子顔上げて
「我等七人」と聲凉し

否少女子よ二人の魂は
神のみ國に行きたれば
殘るは同胞五人と
云へど少女は頭を振つて
「否同胞は七人よ」

蝶に

花にとまれる蝶々よ
汝は眠れりや覺めたりや
汝を眺めつゝ神往いて
我今去來の夢に醉ふよ

眠れる海の靜かなるごと
つゝみ心にいましは眠る
軟風そよ〳〵木の間漏れて

汝を襲ひ來れと呼ばば
汝は興往くに堪へずして
憧れ行くか翔々と

其花園は己が園
咲いたる花は妹の
すさびに植ゑし花なれば
汝が翼疲るゝまでは
胡蝶よとまれ其花に

其處は汝が宿なれば
とまれ園生に園生の花に
平和宿る園なれば
汝を待つ災はひそまざるに

胡蝶よ來れ此枝に
幼なき時の一日の
今日老いし日の百日より
猶長かりし夏の日に
終日醉ひし思出や

歌ひ遊びし感興の
夢多かりし跡問うて
語りて共に樂しまん
胡蝶よ來れ此枝に
我膝近き此枝に

雲雀に

虚空を翔ける旅人の
神の歌姫、雲雀よ汝は
業風すさぶ地は憂くて
飛ぶか大空雲居に高う

天に憧れ鼓翼く隙も
露熱りたる麥畑に
時經ては又落し來る

其巣暮うてふりさけ見つゝ
雲雀よ汝は囀りかはし
大空高く翔けり行くか

谷の小藪は鶯に
任せて揚れ舞ひ雲雀
さと地におろす時雨もかくと
諧音急に調も高く
汝が歌ひ行く大空は
汝のものよ大空は

眼は絶えず向上の
行手を高く仰ぎつゝ
うれたしの世に身は置いて
世と煩ふも道捨てぬ
高き道士の面影を
雲雀よ我は汝に見る

紅雀に

曇も見えぬ初夏の
明き日影に身を浴びせ
人氣絶えたる畑中に
木の花雪と飜れ咲く
果實畑に身を投げて
去年送りたる花鳥と
親しむ今日の平和かな

花の香流る畑中に
唐紅の粧ひして
聲美くしく、羽麗はしき
汝幸多き客人よ
夏立つ今日の歡びを
先導して勿體顔に
梢に囀る紅雀よ
此處は汝の天地なり

花、鳥、蝶と思ひ〳〵

美くし夢に醉へる中
汝は獨涼亭を
飛翔つては一心に
側目も振らず働いて
囀るよ、尾を振るよ

肚胸に溢る歡興を
分ち與へて吝ならず
いそしむ汝の樣見れば
汝は活動の權化かな

花の香送る軟風に
うなづく榛の青葉影
飛ばんとしては羽打振ひ
囀づる汝は何處へ移る
闇き日影を投げ落す
高き梢か日を浴びる

散りては狂ふ木の葉の如く
思はぬ方に飛去りて

したり顔する紅雀は
ちらと人目を盗みしが
納屋の庇か鳴きしきる
聲喧しう注ぎ來る

蝶追立つる知更鳥に

我國人になさけ知る
信心深き知更鳥と
持囃されて其胸は
眞紅の色に彩れる
汝愛らしの知更鳥よ

雨戸に噎ぶ秋にもなれば
朝々外の面に囀交はす

汝愛らしの知更鳥よ

ノーウェー邊のお百姓は
ビーターと呼び、山深き
芬蘭や魯西亞では
トーマス公と汝を呼ぶと

其他汝が居る國々は
何處もよき名汝に負はせ
めて持囃すと聞くものを

雲居に居ますアブラハムは
下界に汝の爲體
見給はゞ何と仰せらる可き

美くし蝶は其友を
慕つて近く飛び來る
我れ木の蔭にさまようて
汝に追はれし蝶見れば
蝶は我側飛びめぐり
木蔭の枝を出つ入りつ

飛廻つては戯くよ

昔太守が臨終に
やがて孤となる其二子を
枕邊近う呼寄せて
叔父なる人に行末を
頼んで逝きし其後に
叔父なる人は腹黒の
其子屠つて野に捨てし
其亡骸に柴啄みて

手向せしてふ知更鳥よ
かく人の子に優しき汝の
こはいかにせし蝶逐うて
したり顔なる汝がさまは

夏の眞晝を花の香に
憧れて飛ぶ蝶の身の
害なからずや知更鳥よ
胡蝶は花に醉はしめよ

節面白き汝が聲は
我に爐邊の興を添へ
舞面白き蝶々は
我に眞夏の友なるを

糸遊燃ゆる畑中に
蝶と縺れて遊ぶのを
何故嫌ひだろ知更鳥は
胡蝶の羽の緋の色は
汝が胸に應へるを

かく人々に持囃さるゝ
正直者の知更鳥故に
これから蝶は逐はぬこと

我妹子に

彌生の朝明夢のせて
大氣はろ〳〵澄行く中を
庇に繁る落葉松の
梢に知更鳥律呂も高う

見よ打烟むる朝明の
綠の草に、野に、山に
肉の快樂の與り知らぬ

幸流れずや野を罩めて

朝餉は終へぬ我妹子よ
書冊抛ちて、野に出でて
平和流る大空の
大氣に吸ひて甦へれ

晴衣はいらじ布子着て
エドワードも共に連れ
出でよ我妹子書擲ちて

今日の一日は野に憧れむ

生ける日記に書き得べき
かく樂しき日のある可きや
友よ今日より改めて
年のはじめと書かしめよ

愛今普ねく地をつゝみ
人の心を流るゝよ
地より人に、人より地に

愛に醉ふ可き時は今
智慧の百年抛ちて
この一時に醉はしめよ
毛竅を通す春の氣の
泌み行く如く覺ゆれば

來む年長く顧みて
かゝる思に返へり得可き
長への則、聲なき經を

この朝明に得せしめよ

愛に生く可きよすがには
我等の胸の樂の符を
天地に溢るこの愛の
力によりて調へむ

晴衣は入らじ布子着て
エドワードも共に連れ
出でよ我妹子書抛ちて

今日の一日は野に憧れむ

眠に

草軟らかき野を行く羊
呟ける蜂、雨の音
岩走る水、谿の風
風、野となれば海見えて
白紙散らす波頭
波碎くれば又更に
瑠璃透く空と變り行いて
眠成らざる眞夜中を

思は千々に走るかな

まどろまぬ間に朝とならば
園の花影木の間より
百囀の鳥の聲
枕に近う通ひ來む

前夜も夜一夜眠られず
其前の夜もまどろまて
明したりしを今宵こそ

曉知らず熟睡せん

熟睡よ今宵襲ひ來よ
日と日を劃る汝なうて
朝の快樂の得らる可きや
我を養ふ熟睡よ今宵
訪れよ、襲ひ來よ

花子の歌へる

露落ちしきり星瞬いて
野は暮れて行く黄昏を
さまよひ來れば「さあ飲むの」
籬の内に愛らしの
聲する方を瓜立てて
覗けば柔毛軟かき
小羊の側に少女子の

やさし姿の草の上に
小き羊は小紐もて
石につなぎし傍らに
少女は草に膝折りて
夕餉遣るらし小羊に
尾を掉ひつゝ其手より
貪り食ひし小羊に
「水はよくッて」と愛らしく

凄しき聲に少女子は
小羊の顔打戍る

はしき少女は花ちやんと
呼ばれてやさし村の花
少女はやをら鑵取りて
馳せ出せしがふり返り
小羊の方を見戍れり

其と知られて樹の蔭に

狐鼠狸我は伏兵の
つく〳〵少女の顔讀めば
やさし少女は小羊に
かく話すらし小羊に

「何苦しみて汝は紐を
さう引き張つて身を焦躁る
汝に何の足らはざる
床に、宿りに其草の
應はじとてか其草の

其處はよき床よき褥
寐ねよ汝は其の床に
床ならじとやさらば何
汝に足らはざる者は何

「何を求むる、何足らはざる
脚は丈夫に毛も麗はしく
草はよき草よい花咲いて
青く波立つ麥の葉は
日ねもす汝に口笛吹いて

朝日登りて暑からば
山毛欅の樹蔭に身を避けよ
そは汝を蔽ふに足る可きに
「雨や嵐の來らば？」と
要なき事よ雨風は
襲ひ來ざれば其床に」

「寐ねよ汝は其の床に
汝は忘れしか父樣が

連れて來ませし時の事
群にはぐれて汝は獨
母さんの跡尋ねつゝ
泣きつゝ山を迷ひしと」

「不憫なればと父樣は
汝を抱いて來ませしよ
汝は幸と思はずや
汝の傅は忠實なるを
何を求めて野へは行く

汝を尋ねて野に迷ふ
母さんとてもこの母の
その優しさに如く可きや」

「日に二度宛は此甕に
露垂る如き眞清水を
岩が根傳ひ汲み來り
又露降りて土濕める
頃にもなれば鮮しき
乳も持て來て日に二度は

汝に與へずやよき乳を」

「今に倍して大きくならば
馬にするごと軛付け
小さき荷車汝に挽せ
共に遊びて娛しまん
又風寒き冬にもならば
圍爐裏の側を汝に割き
汝の檻も家内にしやう」

「猶且いけない？往て見たい？
定めし野に居る母さんの
魂汝に通じ來て
誘ふものらし野に來よと
もとよりそれと露にだも
人に知られぬものゝ中
汝に尊きものもあり
又汝がそれと夢にさへ
見ざるものにて汝には
尊く欲しき者あらん」

「青葉綠葉滴れる
山の尾の上に風騷ぎ
雲は見る〳〵蔽ひ來る
疾風今にも山に荒れ
土砂を穿ちて灑來ば
雀躍りしつゝ歌ひつれ
ちよろ〳〵走る谿川は
餌物を屠る獅子のごと
石轉ばして狂ひ出ん」

「さはいへ此處は母屋も近く
空には鷲も居ぬ程に
心置きなく草に寢よ
よくッて？、いけない、どうしたの
何故汝はさう紐曳いて
藻掻いて居るの、早く寢な
明日にもならば又來やう」
歩みは遲く逍遙の

歸るさ更に歌繰返し
成りたる歌は花子と我の
合作也となしたれど
更に再び繰返し
さならじ總て花子のと
歌の作者は花子に代へぬ
そはあの顏やあの聲の
やさしさ深く身に泌みて
少女は人にあらざりし故

海邊に立ちて

まだ身にのこる悔恨の
胸に喰ひ入る切なさや
不安の希望惱ましく
企成らぬわづらひは
身を蠹ばみて徒の
希望に心千切るゝ如き
その果敢なさは船人ぞ知る

思へ命數に身を委ね
冷やけき海に乘出てつ
うつろひ易き命運の
星に武運を投掛けて
世と戰はん戟取りし
船子が身なるを殊に切に
悲痛は深く知られでや

見よ夢淡き外國の
白波騷ぐ海岸を

舷遠く顧みて
母、戸に寄れる故郷の
門の邊、圍爐裏、踏慣れし
床板さへに數へては
心の如何に結ぼうる可き

又見よ白き波頭
夢美しき睦言に
醉ふ可き優し花嫁や
醉ひしくはし妻思ひ見て

蒼溟萬里蹴つて行く
舷頭遠きもの思ひ
夢路に通ふくさ〴〵は
行き越し方の儚なさや
やがて來らん惱ましの
身を切る如き切なさか
若し又假令蓬萊の
華燭美々敷かざろへる
快樂の園に入りしとて
そは現身に得られざる

果敢なき夢を如何にせん

世の風浪と戰ひて
今日あるを得し船人よ
血刀提げて敵討ちし
猛者も讓らぬ戰に
戰ひ克ちし船人よ
汝に榮あり傲あり

さいへ浪なき蒼溟の

默せる夕月冴えて
銀光淡くさゞなみに
音なく流る宵々は
わが勇ましき船人を
勢譽、權勢、富、榮の
影追ひ疲れ非を悔いて
今日平和に憧がるゝ
高士の高き面影か
あるは勢譽の空しきに
今日は巷に大隱の

幸を無き名と爭へる
その賢人の面影に
船人汝を類へても見ん

靜かなる夕

露降るなべに濕めり行けど
晝の溫味を捨てがてに
蒸する大氣香を載せて
靜かに流る夕かな

一度仰ぐ大空は
星を見ざれど更に又
仰けば高く白銀の

光を投げて瞬ける
星の數々かつ〳〵に
綺麗嵌めて敷ける見ゆ

今し塒に騷がしく
鳴きしきりたる鳥の音の
全く樹蔭に消え去れば
闇にうするゝ葩の
仄かなるごと寂莫は
音なき空を領じたり

鐵の銹漂はし
響く孤村の晩鐘は
時誤たず期に應ひ
濁れる音に九つの
續起正しう今鳴りて
波動は空を渡り行く
見よ木枯に礫を打たれ
杵の緒凍る冬の夜
爐邊に聞ける人々に

不安を誘ふ冬の日の
凍る響と比べても見よ
朝日と出でゝ夕陽に
伴ひ歸り戸を立てし
牧者其時感激の
祈禱捧げて子供等の
枕邊探り床に入る
園の樹蔭を夜陰に乘じ

憧がれ出でし蝙蝠は
路次の其處此處、飛翔り
白蛾を睨ひ音も立てず
呟き乍らひら〳〵と
翔る夜鷹の鳴く聲は
勤むる人に怠る人に
同じく夜の歡び誘ふ

樂の音軟か流るゝ亦は
目に見えねども何處と知られ

土踏む蹄、轍の音は
今歛まつて聞えざる中
端艇か岸にかゝるらし
煩ひ知らぬ世の人も
死の色浮ぶ病人の
變りし樣に首投げて
深き默思に入る如く
弱く水切る櫂の音は
默思に人を誘ひつゝ
岸の邊近くかゝりたり

ウォルヅヲォスの詩 終

大正九年十二月十日印刷
大正九年十二月十二日發行

發兌元 東京市京橋區南鍋町一丁目 隆文館株式會社

不許複製

ウォルヅヲォスの詩

[定價金壹圓貳拾錢]

隆文館株式會社代表者
編輯兼發行者 松野鶴平
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

印刷者 高橋治一
東京市神田區宮本町五番地

印刷所 中正社
東京市神田區宮本町五番地

振替口座東京八五三番
電話銀座一七八〇番

2-264

夏目漱石先生序　文學士　浦瀨白雨先生譯　三版

ウォルヅヲオスの詩

ウオルヅヲオス曰く「詩をして貴からしむるは、貴人を題とするが爲めにあらず、唯だ感情の眞なるにあり。」と、實に美しきハートに醸されたる大詩人の純眞と感情の發露を愛誦し、文藝の眞致を感得せよ。

文學博士　坪内逍遙先生序　早大教授　片山伸先生譯　三版

新形美本
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

テニソンの詩

現文壇の大家天弦氏が青春時代に於げる華麗の詩譯にしてテニソンの如き天啓的詩才なる尤も忠實に紹介したるもの、是れ古今東西の若き人々の胸を通じて薫習されたる餘香の貴き現れ也。

新形美本
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

終